釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和６年（2024年）11月11日発行　VOL 33

「自立した学習者」の姿

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

10月31日に文部科学省は「令和５年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果を公表しました。本調査は、児童生徒の問題行動や不登校等について、全国の状況を調査・分析することにより、教育現場における生徒指導上の取組のより一層の充実に資するものとするとともに、その実態把握を行うことにより、児童生徒の問題行動等の未然防止、早期発見・早期対応に、また、不登校児童生徒への適切な支援につなげていくため、さらに、本調査結果を踏まえ、教育委員会等における問題行動等への取組や、不登校への支援等の一層の充実に資するために、1966年度から毎年実施されています。調査項目は、暴力行為やいじめ、不登校、自殺など多岐にわたり、最近では、いじめの認知件数や不登校の児童生徒数が注目され、報道においても大きく扱われています。

先に公表された本調査の結果においても、小・中学校・高等学校及び特別支援学校における「いじめ」の認知件数は732,568件（前年度681,948件）であり、前年度から50,620件（7.4%）増加していること。児童生徒1,000人当たりの認知件数は57.9件（前年度53.3件）であり、認知件数は新型コロナウイルス感染症の影響で令和２年度に一旦減少したが、その後３年連続増加し、過去最多となったことが分かりました。また、小・中学校における「不登校」児童生徒数は346,482人（前年度299,048人）であり、前年度から47,434人（15.9%）増加したこと。これは11年連続増加し、過去最多となったことが分かりました。そして、不登校児童生徒について把握した事実としては、小・中学校においては、「学校生活に対してやる気が出ない等の相談があった」(32.2%）が最も多いことが分かりました。

「学校生活に対してやる気が出ない」ということは、学校生活の大半を占める「『授業』についてやる気が出ない」という解釈ができると思います。このことについて、私たちはしっかりと受け止めていく必要があると思います。

本校においては、生徒たちが予測困難な未来社会を生き抜いていくために、「自立した学習者」になることを目指して日日、授業改善を進めています。この方向性は間違っていないと確信していますが、生徒たちがどんな姿になれば「自立した学習者」になったと言えるのか、この具体の姿を共有して授業改善に取り組むことが大切であると考えます。

改めて、「自立的な学習者」、つまり、自立的に学ぶ生徒の姿をイメージしてみたいと思います。それは、学習者としての生徒が自らの学びをコントロールすることと考えると理解しやすいのではないかと思います。学習する対象に興味や関心を高め、自ら前向きに学びに向かう姿は、私たちが想像する自ら学ぶ姿と合致すると思います。また、大変だと思うことや少し面倒だと感じることであっても、粘り強く取り組み続けることや、諦めずにやり抜くことも自ら学ぶ生徒の姿として考えることができます。このような具体の姿の実現に向け、今後の授業改善を進めていきたいと考えます。